早期回復へ体力アップ作戦

手術前リハビリ・治療後すぐに食事…

呉医療センター

手術前のリハビリや術後まもなくの食事を取り入れたプログラムで、肺疾患の患者の早期回復を目指す試みが、国立病院機構呉医療センター・中国がんセンター（呉市）で始まっている。患者に体力をつけてもらってより安全に治療を進めるとともに、日常生活への一日も早い復帰につなげるのが狙いだ。（標葉知美）

手術の4時間後にベッドから立ち上がる患者を支える原田医師（左端）とスタッフ

プログラムに取り組む呼吸器外科では、患者の多くが70歳以上。手術が必要な患者の約半数は肺がんで長期間の喫煙経験者だ。体力が衰えている上に肺機能が弱っており、術後に合併症を併発するケースが少なくなかった。その改善策として、同科の原田洋明医師（41）が中心となり、プログラムを考案した。

参考にしたのは、欧米で広がる「術後回復強化（ERAS）」プログラム。入院前カウンセリング▽短時間作用する麻酔薬の使用▽栄養指導▽術後早めの食事―など17の手法を組み合わせて、手術による患者のダメージを減らす内容だ。医師や理学療法士、管理栄養士が連携し、チームで実施する。

同科では、手術前後は安静にする従来の考えを見直し、数年前から段階的にERASを導入。2009年からは独自に術前のリハビリも取り入れた。

患者に術前2～4週間、週2回以上通院してもらい、歩く▽手足に重りを付けて前後に動かす▽自転車マシンで下半身を鍛える▽呼吸訓練器を付けてゆっくり肺を動かして呼吸する―などの運動と呼吸の指導を理学療法士から受けてもらう。

昨年末からは、術後4時間後にはベッドから起きて立ち上がり、おかゆなどの食事を取ってもらうようにした。離床と食事を早めて血栓症などの合併症や、消化器の衰えを防ぐという。

これらの手法を合わせたプログラムを「進化版ERAS」と名付け、昨年12月から今年8月末までに、60～80代の患者約70人に体験してもらった。

原田医師によると、体験者は従来の患者に比べ、術後に起こる肺炎や不整脈などの合併症が3割減った。術前の肺活量が向上しているため「術後の呼吸が楽」との感想も多かったという。

肺がんを患う竹原市の男性（71）は、約3週間前からリハビリを始め、9月末に手術を終えた。術後4時間後にベッドから起きて立ち上がり、おかゆを茶わんに半分ほど食べた。「立ったときにぐらつきもなく、食事も無理なく喉を通った」と、術後も体力が維持できていることに驚いていた。

医療関係者と患者が力を合わせて臨むプログラム。医師や理学療法士など多職種がスムーズに連携できるか、患者にリハビリへの積極的な参加を促せるかが課題だ。

原田医師は「早く普段の生活に戻りたいと願う患者にとって、メリットは大きい。今後さらに内容を充実させて他の科でも応用したい」と話している。

肺疾患対象 合併症3割減る

2011/10/12

中国新聞で掲載されました

和気満堂の心で

チーム医療を実践します